

「フアンデーション」

〈特集〉
デザインの考え方を学び、
基礎力を身につける
デザイン学部 体験型共通カリキュラム



名古屋芸術大学グループ 通信

25
October
2013

Close up! NUA-ism

～進化する「名古屋芸大」のDNA
NUA-OB
学生時代にはなかったもの
山下藍
NUA-STUDENT
舞台に立ちたい
音楽学部 声楽コース 3年
堀江綾乃

Lecture 【レクチャー】

特別講義や講演会など
■ 資生堂宣伝制作部 榎原由比子氏の特別講義が行われました

International exchange

Activity 【国際交流活動】
海外の芸術姉妹提携校との交流活動など
■ 慶南大学&名古屋芸術大学
国際交流教員コンサートが行われました

News/Topics

ニュース&トピックス
音楽学部
■ YPF2013サマーフェスタ
in名古屋芸術大学が開催されました
■ Nagoya University of Arts Strings
第6回定期演奏会が行われました
■ 第15回
ピアノサマーコンサートが行われました
人間発達学部
■ 人間発達学部
オープンキャンパスが行われました

美術学部・デザイン学部
■ 美術学部・デザイン学部の
オープンキャンパスが行われました
■ 一日芸大生
「みんなが芸大生になる日」が
開催されました
■ 坂上博氏の特別講座
「広告表現論」が行われました
■ 藤本由紀夫氏による公開講座
「デザインと文化2」が行われました

グループ校特集
■ 名古屋芸術大学保育・福祉専門学校
コラムNUA
「八月の濡れた砂」
デザイン学部教養部会教授 荻原雄一

Master 2 Artist

マスターアーティスト
変化
デザイン学部教授 平田哲生

Information

インフォメーション
■ 名古屋芸術大学
2014年度 入試日程
■ 出版
■ 2013年度 音楽学部
演奏会スケジュール
■ アート&デザインセンター
2013年度
展覧会スケジュール



＜特集＞
デザインの考え方を学び、基礎力を身につける
デザイン学部 体験型共通カリキュラム

「ファンデーション」 *Foundation*



現在、社会や企業の中でデザインに求められることは以前よりも広範囲に渡っています。形や機能性の追求といった面ばかりではなく、社会とのかかわり方や人と人のコミュニケーションといった、一見するとデザインには無関係に思われるような領域にも、デザインの考え方や手法が用いられるようになってきています。では、翻って、芸術大学に入るまでの間に、デザインについて専門的に学ぶ時間はあるのでしょうか。残念ながら、高等学校で美術を専攻した人以外は、ほとんどそんな機会はないのが現状です。社会からの高いニーズがあるにもかかわらず、中等教育までの間では学ぶことができない。そんな現実があります。その橋渡しをするのが「ファンデーション」です。本学デザイン学部では、専門コースを選択する前の1年次に、全ての学生がファンデーションというデザインのさまざまな分野を体験するカリキュラムを受講します。このカリキュラムを通して、幅広い分野を体験し、デザインに対する考えを深め、専門コース選択の一助とします。今回は、このファンデーションについてご紹介いたします。

それまでの教育と大学での専門をつなぐ教育



大学院デザイン研究科長
デザイン学部長

落合紀文

ファンデーション教育の今日

現在、芸術分野での美術やデザインが、中等教育の中で、必ずしも積み上げられて来てはいないように思われます。専門の高校は別としても、本学に入学する普通高校からの多くの学生にとって、「デザイン」は未知で不確かなものかもしれません。約一年間基礎を学びながら、「デザイン」について、専門について考える事が出来る本学のファンデーション教育は、それまでの教育と大学での専門をつなぐ教育だと考えています。

少し前までは、芸術系大学を受験する為に画塾や研究所等、受験予備校に通って、表現技術のトレーニングを重ね、ある程度大学での専門性の事や、自らの将来についてイメージを持った学生が多くいました。受験前に専門に向けての意識と基礎的な表現技術を持つ事は、理想的かもしれません。

しかしながら現状では、それに至る間もなく受験を迎えているようです。従来よりも特別な色が付いていない素の状態の受験生の割合が増えました。入学生も同様です。現在の本学の入試選抜の状況は、入学後、教員スタッフとの遣り取りの中で、必ず成長するであろう学生を多種多様な試験内容で選抜しています。結果、基本的に真面目で吸収力のある学生の割合が増えました。その分、教員スタッフやカリキュラム内容による影響力も増して、ある意味責任が増したとも感じています。特にファンデーション教育の重要性を、再認識しています。

ファンデーション教育の昨日

本学では、創立期より全国から様々な学生が集まる私立大学という事もあって、基礎教育に力を注いできました。専門コースの基礎を集約してカリキュラムを構築してきました。ヨーロッパに姉妹校があったり、過去に英国人スタッフが在籍していた事もあり、ヨーロッパの美術・デザイン教育の歴史や当時の状況を知る中で、そのノウハウを取り入れながらも、本学なりに何度もブラッシュアップしてきた結果が現在のファンデーション教育に繋がってきています。毎年度末に開催するレビュー展で、学年ごとの学修内容と成果を展示発表（プレゼンテーション）して、相互評価しているのも英国スタイルのなごりであり系譜なのかもしれません。

ファンデーション教育の明日

学生は、当然のことながら卒業して終わるというのではなく、大学は通過点であり社会に出て様々なデザインの現場（進学や教育の場も含めて）へ出てゆく事になります。入学時の素に近い状態と比べれば、

ファンデーション教育を経て、専門コースを選択して学び、4年間を経てその結果の一つである卒業制作を見る限り、多様であるものの確実に個人として成長していると感じられます。ですからファンデーション教育から始まる4年間の仕組みが一定の効果を生んでいるように思います。

しかしながら、社会の動向や学生を取りまく環境は固定的ではあり得なく、常に動的である中で、教育環境や教育内容が問われます。より広域化するデザインのフィールドと社会状況の明日を見ながら、入学生と直に接する中で、その都度、カリキュラム内容の検証が必要だと考えます。その中で昨日から続く時間を通して、不変的で継続的な意味や価値を見出す事もありますが、一方でそれに縛られる事も無く、人も社会も時間も動いている事を思えば、動的でありたいと思います。ですから毎年内容は僅かでも変化し、スタッフの変更も続いていく事になるでしょう。もちろんその事の検証も必要ですが、新入学生にとってのファンデーション教育は、定食メニューである故に標準化や固定化に対しての慎重さもより必要となるでしょう。多くの学生がより多様なデザインの現場へ出て行きます。現場（社会）から求められる内容は、質・量ともに増々欲張りな状況です。多様な問題に対して解決するアイデアや実務を学生に求めています。まさに、デザイン本来の力を求めていると言えます。大学は就職予備校ではありませんが、そうした現場（社会）で答えを出していくことが出来る学生を送り出すべく、よりデザインの本質に根ざしたファンデーション教育と、デザイン力を発揮出来る専門教育を目指して展開してゆく事になると思います。



デザイン学部伝統のレビュー展

1年間の集大成として、年度末に行われるのがレビュー展。1~3年の学生全てが、2畳ほどスペースを使いその年に制作した課題を展示する。展示ブースの設営や展示方法に決まりはなく、各人の判断でより効果的に作品をアピールできるよう設営、プレゼンテーションも行う。1年生にとっては初めての展示となり、自分の作品をよく理解してもらうための方法を考える機会になる。ファンデーションで制作した課題も展示される。

8つの課題を通して、デザインの幅広い分野を体験

前期

A 回転体による成型実習

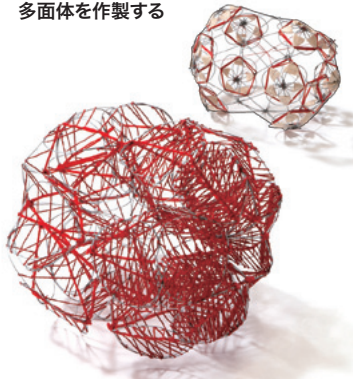
回転成型によって石膏モデルを完成させる



回転成型で作ることができる形態をイメージし、スケッチに起こして曲線・サイズ等を検討。図面を作成し、図面に基づき型板を製作。石膏モデルを作製する。

B 多面体と植物文様

針金のスポット溶接で多面体を作製する



植物を観察した上で、要素や法則を抽出し、さらに針金で多面体を作製する。平面の集合体が立体として立ち上がることを体験して立体的な感覚を養う。

C ミメシス(模刻) ～色彩～平面構成

自然物の観察から、平面表現、立体表現に展開する



野菜や果物などの細密描写を行い、紙粘土で模刻、彩色して仕上げる。さらに同じモチーフで平面に展開。構成や配色などに配慮して展開する。

D あなたの素材観(感)

取材、リサーチ、情報編集のプロセスを体験する



街を歩き、身の回りにある「素材」をスケッチ、メモ、写真など調査。それらを自らの視点を通して編集、一冊のブックとして提示する。

《観察⇨発見⇨展開》のプロセスを繰り返し経験



デザイン
ファンデーション担当

水内智英

ファンデーションの目的はどんなことですか？

大学に入るまでのデザインの理解というのは平面と立体があるという程度の認識ですが、デザインにはコミュニケーションという要素や数学的に考えられた造形、また、クラフト的な側面もあったりと、たくさんの要素が集まってデザインというものができています。それら一つずつ取り出して

やっていくことで、デザインという大きなものを、より幅広く、より深く理解してもらおうというのが最終的な目標です。

具体的には、2つあると思います。一つは、高校時代までに興味を持ったこと、例えばマンガやアニメに興味がある、などがあるかと思いますが、こういったことはデザインの一側面でしかないのです。高校時代、デザインのことを教えてくれるところがないのが現状です。そのまま突き進むのではなく、デザイン全体を理解できるように、やってみる機会を与えるという目的。もう一つは、自分が軸足をどこに置いて、2年生以降、自分の専門として突き詰めていくのか考えること。この2つが目的となります。

実際のカリキュラムはどんなことを？

授業は、前期と後期、1年間です。A～Hまでの8つの課題を、8クラスでローテーションしてやっていきます。1クラス25人程度です。

それぞれカリキュラムの実際は？

8つの課題がありますが、前期と後期で緩やかに目的が変わっています。前期は、デザインの基礎の基礎、土台となる部分です。デザインには、観察して、発見して、そ

れを展開して作り上げるという大きなプロセスがあります。そういう過程を前期の課題で学んでいきます。後期になると、やや専門基礎のような感じになってきます。前期で学んだプロセスを使って、もう少し具体化していきます。例えばE課題のお店のデザインというのは、ややスペースデザイン寄りですし、F課題のモーフィングは、変化ということでやや映像やメディア系の課題に位置づけられます。G課題のピクトグラムはヴィジュアルデザイン寄り、H課題の廃材はクラフト的な要素、そういったやや専門基礎になってはいます。2年生になっていくとここから発展してさらに専門的になっていきます。一つひとつのステップとして身に付けるべきスキルもあるんですが、大きな流れとしてはしっかり観察して、自分なりのものを発見して、しっかりと表現していくというプロセスは共通しています。前期にしっかりと経験しないと、後期の課題は散漫になってしまうと思います。

学生たちは課題の意味を良く理解していますか？

説明はしていますが、理解というやってみて初めてとわかるという感じだと思います。学生たちによく話しているのは、まず自分の思い込みを忘れてもらって、とに

平面と立体を織り交ぜた8種類の課題を、1年間を通して実施。課題に取り組むうちに、さまざまなデザインの分野を体験して基礎実技力を高め、デザインについての考えを深める。

後期

E あかりのデザイン・私の店

空間とプロダクトのデザインを体験する



「あかりのデザイン」では、光の観察や実験、アイデア抽出を行い、モデルを制作。「私の店」では、実際の現場からアイデアを展開し、模型を制作する。

F 知覚とイマジネーション —AとBの間をイメージする

時間によって魅力的に変化する過程を想像し、描き出す



「色紙の混色／透明性の錯視」では、透明感を感じる混色をイメージし色紙で表現する。「モーフィング」では、あるモノから全く別のモノへの「変化」を想定し、かたちと色の変形過程を描く。

G ピクトグラムとタイポグラフィ を使って自分自身を表現する

「私のプロフィール」「私の一日」の中からテーマを選びパネルを制作する



ピクトグラムを使い、言語の異なる人々にも自分自身の情報を伝達できるような作品を目指す。情報社会の中の視覚言語とタイポグラフィの重要性を理解する。

H 廃品による素材体験

廃材を組み合わせる造形物を制作する



身の回りにある廃材を30種以上収集し、組み合わせる立体・半立体・平面を制作する。自分のイメージを表現するためではなく、素材を組み合わせる新しいイメージを創ることを重視する。

かく失敗してもいいと。ファンデーションは、失敗してもその中から学ぶことが目的で、上手な作品づくりが第一ではないと言っています。ファンデーションのうちにどれだけ自分を発見できたり、デザインの世界のことをどれだけ学べるかということが重要で、とにかくいろいろ挑戦して欲しいと思っています。やり終えて、2年生くらいになってくると、ようやく意味がひと揃いになってわかってくるのではないかと思います。デザインの広さと多面性がわかってくるのではないかなと期待しています。

—基礎教育というのはどれくらいの学校でやられているものなのですか？

今、日本でどんなファンデーションデザイン教育が行われているかという研究を僕自身も行ってありますが、意外にやっている学校は少ないです。最初から専門に入ると、専門基礎になってしまうのが現状です。人数にも問題があり、巨大な大学では規模からして厳しいです。本学でぎりぎりだと思えます。システム自体を持っていない大学もありますし、名古屋芸大にファンデーションがあるということは、すごく意味があるし、魅力になるだろうと思えます。

—本人にとって変化や発見があったとしたらすごくいいことですね。

そうですね。スキルが追いついていない学生でも一所懸命やると、作品に魅力が出てくるし、面白いものになってきます。毎回一人ひとり面談をして、指導していますので、そういったところも良くわかります。1年生として入った時から既に将来どのコースに進むか決めていた学生が、いろいろなデザインの側面に触れ、専門の先生からも話を聞いて、別のコースへ進むことがあります。彼らなりに魅力を見つけて、自分の進む道を決めてくれた、そういうことがうれしいですね。

関係しているか、もしかしたら、店員の言葉遣いとグラフィックがどう関係しているかなど、トータルデザインになってきているのが当たり前です。それがグラフィックの世界でも立体の世界でも、どの世界でも起こってきていて、相互浸透してきています。その中で、グラフィックのことはわかるけど、そのほかはまったく興味はないしやったこともありません、という人よりも、どこかに軸足を置きつつも、トータルにデザインを考えられる人材が求められています。今まさに、横断的なファンデーションがあるということの意義は大きなと思います。

—専門性を高めることと相反することはないですか？

デザインの世界も変わってきていて、こういうことがより意味をなしてきているのではと考えています。例えば、今まではグラフィックデザイナーだったら、ポスターやパッケージなどをやっていれば大丈夫でしたけど、今、グラフィックに求められるものといえば、様々な要素の中で、それがどう関係しているかであるとか、複合的になってきています。レストランのメニューのデザイン一つとっても、それが内装とどう関係しているか、制服とメニューがどう関係しているか、お店の外装とどう



Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism



「キララの手紙をくれたのは、昨年度担任した。現在年中の女児です。とても負けず嫌いな子だったので、きっと、この手紙も泣きそうになりながらも根気よく書いてくれたんだろうと思います。その姿を想像すると、成長を実感できます。」

色鉛筆で描かれている私の顔の絵をくれたのは、今現在担任している4歳の女児です!



「昨年度担任した子どもからもらいました。この子のお母さんは、物を作ることが好きなようで、母と子の合作となっています(^v^)」



学生時代にはなかったもの

就職を希望する学生にとって、自分の将来について不安に思うことでいっぱいではないかと思う。特に教育者になることを志望する人間発達学部の学生には、学校、幼稚園、保育園などが主な就職先であり、それらの求人が少子化や経済状況のために厳しくなっていることはご存じの通りである。本校も、また、学生自身も、大学在学中の4年間で教育の現場に対応できるような実力を養おうと、多くの実践的なカリキュラムに取り入れて努めている。しかしながら、実際に現場で日々子どもたちと向き合う先生たちにはとても及ばない。それではどんなことが必要なのか。人間発達学科第二期卒業生、山下さんのお話は示唆に富むものだ。

「思うようにできないのは当然だと覚悟はしてんですけど、思う以上に保育は大変だし、それ以外にもたくさんやらなければならないことがありますね」



幼稚園教員を第一志望と決断したのは実習を経験した大学3年の夏だった。小学校と幼稚園で迷っていたが、実際に実習に赴き子どもと接して決心したという。実習に行った先は、現在務めている外山幼稚園。子どもの自主性を重んじる自由な教育方針が魅力的に映った。「じつは、1年生の時に1日体験実習みたいなのがあって、そのときに初めて外山幼稚園に行ったんです。それ以来、3年の時の実習先も、4年の時にも6月に個人的にお願いしてボランティアに行きました。ずっと素敵だなと思っていました」それで、とんとん拍子で就職が決まったかといえばそうではない。4年でボランティアに行った時に、園長からは今年は採用する予定はないと告げら



先生たちのユニフォーム。おそろいのスモック、自分で付けたアプリケが可愛い「ここのを付けてると、子供が敏感に反応するんです、なんにもないのと違うんです」



子どもの保育以外にも、たくさんの仕事があり忙しい毎日を送る。「行事があれば、事前に何度も何度も打ち合わせをします。実際に行事が終わると、話し合っておくことの重要さがよくわかります」。保護者とのコミュニケーションも重要。

れていた。「そこ以外考えていませんでしたし、どうしようかと思いました。パートでもお願いしようかと思っていましたね」ところがその年の夏になってから、一名欠員が出ることになり歯車は回り出す。「それを聞いて絶対受けますって宣言して。運命だなんて思います」

採用1名に対し、受験者は7名。実習に来ていた受験者もいた。どうして自分が受かったのかわかりませんと前置きしつつも、「やっぱり実習が効いたのかもしれませんが。求人があるかないか関係なく、精一杯やりました」その時点での実力よりも真摯に取り組んでいたことが評価されたのだろう。



希望を叶えた山下さんだったが、現実の仕事は厳しかった。何度も実習で行った先だったが、やはり違いがあった。「実際に働きに出ると、全然違いますよ。すべてに甘かったなと思うような

ことばかりです」最初の年から担任を持った。なんとか毎日やり過ごす、無我夢中の1年間だったという。「学生時代にはわからなかったんですけど、働くということの重さというか、責任みたいなことを強く感じました。実習だと終わりがあるんですけど、働くということはずっと続く。そういった心構えですね。自分も社会人になって初めてわかったように思います」



「まだ2年目なんですけど、今年、実習生を見ることになったんです。ついこの間まで自分も実習に来ていたんですけど、この1年で自分が成長したことを初めて実感しました。去年受け持った、子どもたちの成長を見て、よかった、私でも何とか1年間やれたんだなど。先輩の先生たちに比べると私なんかまだまだなんですけどね」学ぶということに終わりはない。成長過程のういういしいエネルギーがまぶしく、頼もしい。



美術学部に行って学芸員の資格を取ったりしました。せっかくだから、資格があった方がいいかなど。

Vol.51 NUA-OB 山下 藍

(やました あい)
幼稚園教員

1989年 愛知県生まれ
2012年 人間発達学部子ども発達学科卒業
学校法人小牧外山学園 外山幼稚園勤務



舞台に立ちたい



Vol.52
NUA-STUDENT
堀江綾乃
(ほりえ あやの)
音楽学部 声楽コース
3年

ー声楽はいつから? 大学に入ってから始める人も多いよね?

高校時代から、音楽科で声楽専攻だったんです。じつは私、将来舞台に立ちたいと思ってんです。それを目指すきっかけになったのが、小学校3年生の時に初めて見た宝塚歌劇なんです。タカラヅカの舞台にすっかりはまって、それ以来です。父が誘ってくれて家族で観に行っただけですが、私だけがどっぷりはまって(笑)。私ここへ入りたい! ダンス習いたい! となりまして、母を説得して小学生の時からダンスも始めました。

ー最初に「歌」よりも「舞台」があるんだ

そうですね。タカラヅカを受験しようと思ってダンスも始めたし、歌も試験にあるので、それで歌も始めたんです。一度受験しましたが、残念ながらダメだったんです。中学生の頃は毎日のよ

うにスクールに通ってました。3年生になってからは受験用の大阪にあるバレエスクールに毎週通ったり、歌も受験用の歌を専門にみてくださる先生のところへ通って、そんな毎日でした。頑張ったんですけど、実力不足で。でも、そのまま歌を勉強したいなと思って、加納高校の音楽科へ進学したんです。

ー大学はどうやって決めたの? 入ってみてどう?

加納高校の時からお世話になっている松波千津子先生に教わりた、それが一番の決め手ですね。音楽科の高校だったので、大学に入ってから授業で困ることはなかったです。大学は自由な雰囲気ですね。高校のときは、何かしら行事で披露しなければいけないことがあったり試験があったりと、いつも、やらなきゃやらなきゃ、と追われていたんです。でも、大学に入って自分としては少し余裕ができたように思います。余裕ができた分の時間で、どうするか自分で考えて自主的にやることを考えるようになりました。

ーすごくひたむき!

声楽に、ダンス、日舞も習っているのですが、すごく恵まれていて素敵な先生ばかりなんです。技術的なことだけじゃなくて、お稽古事に対しての姿勢だとか、ちょっと大げさかもしれないですけど、生きていく上での姿勢など、身近で感じたりお話を聞いたりしたことが今の自分の考え方に大きく影響してるんじゃないかなと思います。道を究められてきた人ばかりで、本当に先生に恵まれてきたなと。

ー将来は? ダンスや日舞もできるんだよね

ちょっと焦りが出てきました。あと1年半で卒業した時の自分の姿を考えた時に、どうなるの



日舞、男役をやらせてもらって歌の初披露。"シンデレラ"貴族の青年役。えてすごうれしかった。



今夏、加納高校音楽科の同期生と行ったコンサート。



ダンス初舞台でのもの(右から4番目)。

かなと。歌はもちろんですけど演じることも興味があるんです。歌うって、オペラでない限り動いて歌うことは少ないと思うんですけど、役として歌うということには変わりがないと思うんですね。オペラのアリアとかではこういう役でこういう人物でというのがありますが、歌曲では何も指定がありません。歌詞しかない。でも、想像するんです。歌っているのは、栗色の巻き毛で、瞳は何色の女の子でとか、そういう想像するのが好きなんです(笑)。それで、どんな服を着て、どういう人を想って歌ってるか、どこで、何時くらいで……、自分で解釈して歌うんです。こうしたことを続けていきたいです。やっぱり実力がなくてどうにもならないので、今は歌の技術を伸ばすこと、たくさん舞台を見て自分なりに引き出しを作れるように頑張ること、自分にできることをやっていくことが大切だと思っています。

堀江さんに聞きました。

ファッションチェック!

持ち物検査

大学は忙しい?



舞台を夢見るコッコツ努力派 頑張っ屋さんの一日



アルバイトは、結婚式の聖歌隊と洋食屋さん。バイト代は、観劇と演奏会に消えてしまったりか。応援している団員を見るために博多まで足を伸ばすことも……「今度もう一度、博多に行かなきゃ」



スカートは衣装から頂いたものです。

バッグの中には演劇、コンサートのチラシの束「半券は全部スクラップブックに保管してます」



タカラヅカで買ったマリーアントワネットの衣装型のメモ帳。「もったいないけど、使わないのも、もったいないし……」

お小遣い・アルバイト

- アルバイト 5~10万円/月
 - アパート等家賃 0万円/月 (実家から通学片道約90分)
 - お小遣い 1万円/月
- 洋食屋さん、聖歌隊でのアルバイト代の大半は観劇代・遠征費に使い、残りは装飾品や貯蓄です。

Lecture

【レクチャー】
特別講義や講演会など

資生堂宣伝制作部 檜原由比子氏の 特別講義が行われました

2013年7月24日(水)、本学西キャンパスX棟で、資生堂宣伝制作部の檜原由比子(ひはらゆいこ)氏によるデザイン実技Ⅱ-2の特別講義が行われました。昨年まで本学デザイン学部の特別客員教授を務めていただいた檜原氏。今回はビジュアルデザインコースの2年生を対象に「空間を創り出すイメージの世界(私の場合)」をテーマにレクチャーをしていただきました。

最初に資生堂のウインドウ(ディスプレイ)の歴史や資生堂本社ビルをはじめ、各施設のウインドウのコンセプトやその特徴について説明を受け、約一世紀にもおよぶ資生堂のウインドウの変遷には、数々の歴史が刻まれていることを学びました。

続いて「イメージの創り方」についてのレクチャーです。イメージを創る際に“自分のフィルター”と“言葉のかけらを集めてイメージを導く”ことを大切にしているという檜原氏は、イメージを作り始める時には「発信する目的」と「受信する環境」を見つめ直すタイミングを持つことが重要だとアドバイスしました。「最初に発信する目的の確認を行い、次に受信する環境を客観的に把握します。そして、アンテナを張って社会に対して目を向け、情報収集によって多くの可能性に触れる。発信ポイントを探することで、さらに着眼点が広がります。」と続けました。

この発信する目的と受信する環境から生まれた、たくさんの言葉のかけらを、自分のフィルターのふるいにかけて、最後に残った言葉のかけらが「イメージの源泉」だと檜原氏は解説されました。「自分のフィルターは人それぞれです。

私の場合は…」と前置きをして、ご自身のフィルターについて説明をされました。

檜原氏の自分のフィルターは「資生堂のミーム」と「個性」によって構成されていました。資生堂のミームとは資生堂の文化遺伝子のこと。また、個性は自分史や自分の思考・感受性のことです。ちなみに、ミームとは文化遺伝子という意味を持つ造語だということです。

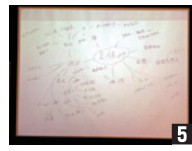
その資生堂のミームは、さらに3つの要素で構成されていました。1つ目は「パイオニア精神」。いつの時代でも開発マインドを持ち、新しいことに挑む資生堂の企業ポリシーに基づいています。2つ目は「美意識」。“すべてのものはリッチでなければならない”という福原信三初代社長のメッセージに込められた“すべての質を高め、心までも豊かに”という企業としての志。3つ目は「ロゴマーク」。初代社長が創案し日本のグラフィックデザインの先駆者でもある、資生堂の山名文夫氏が手がけたマークとロゴタイプ。それは、企業ポリシーの視覚の原点です。

一方の個性(自分のミーム)は、檜原氏の自分史であり、思考そのものです。小さい頃に姉が通う絵画教室で、先生に絵を褒めてもらった経験を発端に、小・中学時代はマンガの模写、ファッションに目覚めた高校ではファッション画に夢中になりました。他にもテレビの歌謡番組やCMなどにも強く影響を受けたといいます。そして、大学院で日本文化について見つめ直す機会に巡り合ったことが、日本文化と西洋文化の融合を目指す資生堂に入社するきっかけになったようです。

そんな数々のミームを併せ持ったご自身の思考について「段取りなしのアクション」、「テレビ好き」、「収集癖」、「ものが捨てられない」、「人間ウォッチング好き」と分析されています。収集癖やものが棄てられないなど、一見イメージ作りと関係なさそうなことも、自分のフィルターに活かされていると檜原氏はいい、「あらゆることが自分の個性を作り、自分のフィル



- 1 資生堂宣伝制作部の檜原由比子氏
- 2 資生堂本社ビル「ホットクリスマス」(1995年)
- 3 エコールドハヤマ「原点回帰」(2004年)
- 4 エコールドハヤマ「共に。人と人との間に」(2002年)
- 5 テーマは「夏休みから連想するワードをできるだけ多く書き出す。」
- 6 レクチャーの後は自分のフィルターを見つめ直す練習としてワークショップが行われた



ターとなって、イメージの源泉になっている。」としました。そして、イメージを創り出すポイントの総括を次のようにまとめられました。

1. 目的・環境を常に念頭に置く
2. 自分のフィルターを通す
3. 言葉のかけらを集めて考える(キーワード)

このイメージの創り方を活用した例として、資生堂のウインドウ作品が紹介されました。作品は大きく3期に分かれています。

第1期は「街との共鳴」。1991年のバブル崩壊直後の社会不安の時代だからこそ、身近な素材や分かりやすい形の表現でハートウォーミングな世界を構築しています。代表作には資生堂本社ビル「ホットクリスマス」(1995年)などがあります。

第2期は「企業のアイデンティティ」。バブル崩壊後の長引く不況の中、企業の倒産や不祥事などが多発。この企業の社会的信頼性が大きく問われる時代に、社会と企業の関係を深く考え、企業のアイデンティティを伝える場としてウインドウを活用しています。代表作にはエコールドハヤマの「原点回帰」(2004年)などがあります。

第3期は「社会へのまなざし」。2000年以降のテロや戦争により不安が広まった時代。企業の社会

への祈りやメッセージ、思いや活動を伝える空間として、ウインドウを活用して新しいコミュニケーションの可能性に挑戦しています。代表作には資生堂本社ビル「夢の結晶」(2001年)やエコールドハヤマ「共に。人と人との間に」手話による表現(2002年)など。その後、社会へのまなざしはバリアフリーコミュニケーションへと進化して現在も模索が続けられています。

最後に『見えない種』というメッセージを送り、檜原氏はこのレクチャーを終えられました。このメッセージを受け取った受講生たちが、デザインを通して新しい人や社会との関係を生み出す芽を大きく育てていってくれることに期待したいですね。

『見えない種』

デザインに自分なりに伝えたい思い、メッセージを込めます。

それは、デザインに込めた見えない種。

自分のアタマの中に芽生えた種なのです。

私はデザインにその種を込め、人や社会に蒔きます。

その種は、いろんな人の中で芽生え、成長していくかもしれません。そして、人と人、人と社会の新しい関係を生み出すキッカケになってくれたらと願っています。

相互に開催されています。

山田敏裕音楽学部長の挨拶で始まった今回の演奏には、慶南大学からピアノのイ・ソジン学科長、ヴァイオリンのチャ・ムンホ教授、ピアノのチョ・スヒョン准教授が出演。本学からは、声楽パリトン

慶南大学 & 名古屋芸術大学 国際交流教員コンサートが 行われました

2013年7月4日(木)、本学東キャンパス3号館音楽講堂ホールで、本学の姉妹提携校である韓国で

南大学との国際交流教員コンサートが開催されました。

この交流コンサートは2008年度から本学で始まり、教員の演奏を通して双方の大学の絆を深めるとともに、教員のレベル向上を図ることを目的として日本と韓国で

International exchange Activity

【国際交流活動】
海外の学術姉妹提携校との
交流活動など

の澤脇達晴教授、クラリネット奏者の竹内雅一教授、ソプラノの松波千津子教授、テノールの山田正文講師、ピアノの山下勝講師、ピアノの山本多恵佳助手が出演しました。

プログラムは、チョ・スヒョン准教授のピアノ伴奏による澤脇達晴教授の独唱でスタート。続いて、ヴァイオリンのチャ・ムンホ教授、ピアノのチョ・スヒョン准教授、クラリネットの竹内雅一教授によるアンサンブルでハチャトゥリア

ン作曲の「ヴァイオリンとクラリネットとピアノのための三重奏曲ト短調」が演奏されました。そして、ブッチーニの歌劇「蝶々夫人」より“ある晴れた日に”“魅惑に満ちた美しい瞳の娘よ”を山本多恵佳助手のピアノで、ソプラノの松波千津子教授とテノールの山田正文講師が歌い上げました。最後は、イ・ソジン学科長と山下勝講師のピアノの連弾で、ドヴォルザークのスラブ舞曲第1集と第2集が演奏され、終演となりました。



1 澤脇達晴教授のソロ(ピアノはチョ・スヒョン准教授)
2 「ヴァイオリンとクラリネットとピアノのための三重奏曲」ヴァイオリンのチャ・ムンホ教授(左から2人目)、ピアノのチョ・スヒョン准教授、クラリネットの竹内雅一教授(右)
3 ソプラノの松波千津子教授(中央)とテノールの山田正文講師(右)、ピアノは山本多恵佳助手
4 イ・ソジン学科長(手前)と山下勝講師(奥中央)のピアノの連弾

した。会場を埋めた大学関係者や来場者からは、双方の大学を代表した

出演者の熱演に、大きな拍手が送られていました。

News & Topics

音楽学部

YPF2013サマーフェスタ in名古屋芸術大学が開催されました

ヤマハピアノフェスティバル(YPF)2013サマーフェスタ in名古屋芸術大学が、8月24日(土)から26日(月)まで、3日間にわたって本学東キャンパスで開催されました。

この催しは、YPF事務局がYPF予選の受賞者への副賞として、受賞者に限定して開催しているもので、音楽大学で開催することにより、今後のピアノの上達に向けて日頃のレッスンをより楽しくなり、次の成果へと確実に結びついていくことを意図して行われています。

音楽大学で開催するメリットは、音楽大学という場で演奏でき、音大の教授から講評がもらえること、音楽大学(場・人・雰囲気)を実際に体験し、知ることにより視野が広がること、緊張感のある演奏場面での演奏経験を積み重ねることにより、レベルアップ、更なるモチベーションのアップ、次のステップに向かう意欲などが芽生えること、などがあります。

初日の進行は、2号館1階ロビーで受付を済ませた後、午前9時15分から参加者全員を対象としたオリエンテーションが、コンサート会場である3号館ホールで行われました。

オリエンテーションでは、まず、本学を代表して山田敏裕音楽学部長の挨拶があり、続いて、広報企画部次長の金子靖から名古屋芸術大学の紹介が行われました。この後、音楽学部の学生3名が登場して、小・中学生の頃からの様子を含めて音楽大学に進学した経緯



1 オリエンテーションの様子(学生たちのトーク)
2 コンサート演奏風景
3 演奏を聴きながらアドバイスカードを記入している先生方
4 ヤマハフルコンサートグランドピアノ「CFX」の試弾会の風景

や目的、また、実際の授業や学生生活などについて、質問に答えるかたちで語ってくれました。

そして最後に、学生(院生・研究生を含む)によるウエルカムコンサートが行われました。ピアノソロ2曲の演奏とピアノ、オーボエ、ホルンのアンサンブルでした。

オリエンテーションを終えた参加者たちは、A・B2つのグループに分かれて、コンサート、昼食、学内探検、に交互に参加して1日のスケジュールをこなしました。学内探検は、本学の在学生在がレッスン室、練習室など音楽大学なら

ではの場所や施設を案内するものです。

コンサート会場では、緊張しながらも一生懸命演奏する子どもたちの姿が印象的でした。大学教授からの演奏に対するアドバイスカード(講評)はコンサート終了時に受付で手渡されました。

また、4号館3階のホールでは、有名ピアニストに評価の高いヤマハフルコンサートグランドピアノ「CFX」の試弾会も行われました。

YPF2013サマーフェスタ in名古屋芸術大学は、3日間で合計145名が参加して行われました。

音楽学部

Nagoya University of Arts Strings 第6回定期演奏会が行われました

2013年8月28日(木)、名古屋市中区の名古屋電気文化会館ザ・コンサートホールにおいて、Nagoya University of Arts Stringsの第6回定期演奏会が開催されました。

NUA Stringsは、2008年に、名古屋芸術大学アンサンブル研究所に所属する同大学及び大学院弦楽器専攻の卒業生により結成された

アンサンブルで、現在では現役の学生も参加しています。音楽監督に同大学の教授である森典子氏を迎え、年1回の定期演奏会を行っています。

今回のアンサンブルは、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、オーボエ、ホルン、チェンバロの構成で、指揮及びヴィオラを同大学の客員教授である林徹也氏が執りました。

プログラムは、前半に、ヘンデルの「合奏協奏曲 二長調 作品6-5」と、バッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV1043」



1 Nagoya University of Arts Stringsの演奏
2 「2つのヴァイオリンのための協奏曲」。正面左が森典子氏、右が村越久美子氏

が演奏され、ヴァイオリンは同大学の森典子氏と村越久美子氏が協奏されました。休憩を挟んで後半は、モーツァルトの「フルート協奏曲 第2番 二短調 K.314」と、グリーグの「ホルン組曲 作品40」が演奏されました。フルートは同

大学卒業生の岡本卓也氏が、ヴィオラは林徹也氏が演奏しました。

弦楽器の織りなすしなやかで叙情あふれる音色に、満員の客席から大きな拍手が送られていました。夏の夜の時を忘れるコンサートでした。

音楽学部

第15回ピアノサマーコンサートが行われました

名古屋芸術大学音楽学部主催の第15回ピアノサマーコンサートが、2013年8月8日(木)、東キャンパス3号館ホールで開催されました。

このコンサートは、演奏学科ピ

アノコースの学生のうち、実技試験で選ばれた優秀な学生たちが出演して行われているもので、毎年この時期に開催されています。

ピアノコースでは、ステージで

の演奏経験を教育の重要な位置づけとして捉え、毎年多くの演奏会を開いています。ステージでの演奏は「これまで培ってきたものを信じ、自身の力で最後まで成し遂

げる」その成果を問う場にもなりません。

プログラムは、前半に1年生から3年生までの11名が演奏しました。休憩を挟んで、後半も1年生から4年生までの11名が演奏し、

合計22名が出演して行われました。真摯にピアノに向き合い、日々練習に励んでいる学生たちの精一杯の演奏が披露され、ホールを埋めた聴衆から大きな拍手が送られていました。



人間発達学部

人間発達学部 オープンキャンパスが 行われました

人間発達学部の本年度第3回目のオープンキャンパスが、2013年8月24日(土)、本学東キャンパスで開催されました。あいにくの雨模様の中にもかかわらず、午前10時前には、大勢の高校生が1号館1階の受付に集まっていた。

参加者たちは受付終了後、まず、恒例の「模擬授業」会場へ移動。2つのコースから好きな授業を受講しました。1号館4階の「国語『読むこと』の内容」をテーマにした授業では、国語の学習内容「読むこと」についての指導の歴史をふまえながら学びました。また「子どもと仲良くなれる魔法の方法、伝授します」という講義は、11号館1階の子どもコミュニティセンターで体験授業として行われ、子どもを前にした時のドキドキした気持ちを抑え、勇気をもって踏

み出す行動のあり方を実技として体験しました。

模擬授業のあとは、それぞれの目的に合わせて自由にキャンパス内を見て回りました。メイン会場の1号館のロビーや教室には、たくさんの体験コーナーが用意されていました。例えば、3階ロビーの紙工作コーナーでは、ストローを使って吹く息の力で発泡球を吹き上がらせて楽しめる「ストローおっとせい」を作って遊びました。3階305教室では、「模擬面接」が行われました。入試の面接が実際に体験できるように、本学の教員が面接官となって、集団面接が行われ、たくさんの高校生が体験しました。4回ロビーで開催された自由工房の活動では、スーパーボールを使った飛び出すロケットを作って楽しみました。地階の調理実習室で行われた「お菓子づくり体験コーナー」では、子どもに人気のピザやアーモンドクッキー作りに挑戦しました。料理作りのあとの試食タイムでは、学校のこと



- 1 模擬授業 (子どもと仲良くなれる魔法の方法、伝授します)
- 2 模擬授業 (国語「読むこと」の内容)
- 3 出来上がったストローおっとせい
- 4 先生による「知りたいこと」なんでも聞いてコーナー
- 5 キャンパスツアー
- 6 ダンス部の模範演技
- 7 ピアノ相談コーナーの授業風景

や授業、学生生活について在校生から直接聞くことができたこと参加者から好評でした。7階ロビーに設けられた「先生による知りたい事、何でも聞いてコーナー」では、担当教員が対面で疑問、質問に答えてくれるので多くの参加者が相談に訪れていました。

11号館で行われた「ピアノ相談コーナー」は未経験者にも安心の初歩からのピアノレッスンが受

けられました。また、8号館の体育館では参加者を歓迎したダンス部の演技や吹奏楽部による演奏が行われ、参加者から大きな拍手が贈られました。利用者が多いキャンパスツアーは、隣接する付属幼稚園「クリエ幼稚園」を在学がコンダクターとして案内してくれます。子どもの視点で施設を説明するので、参加者にとっては意外な発見も多いようです。

美術学部

デザイン学部

美術学部・デザイン学部の オープンキャンパスが 行われました

2013年7月14日(日)、美術学部・デザイン学部のオープンキャンパスが本学西キャンパスで開催されました。当日は夏空の下、高校生をはじめ保護者、教育関係者など大勢の皆さんにご参加いただきました。本年度2回目となる美術学部・デザイン学部の合同オープンキャンパスは、『アートのチカラを、感動体験!』をテーマに、多彩なプログラムが催されました。

●ワークショップ

美術学部・デザイン学部各コースを模擬体験できます。

[美術学部]

水槽で泳ぐ金魚を描く「ゴールデンフィッシュ!」や、きれいな尾羽をもつ孔雀鳩(くじゃくばと)をモデルに塑像制作をする「小動物をモデルに制作しよう。」、現代アート鑑賞入門講座などの講座が新たに登場。ガラスアート『吹きガラスに挑戦』やロクロ造形体験とい

った定番プログラムも人気でした。

[デザイン学部]

「コマ撮りアニメーション制作」や「カーデザイン入門」といったレギュラープログラムに加え、和紙を使った照明作りに挑戦する「ライティングデザイン入門」やオリジナルかき水作りを通じて食生活について学ぶ「食とデザイン」、本格的な写真現像が体験できる「ピンホールカメラで撮影・現像体験しよう!!」などの新しいプログラムが参加者たちに好評でした。

●留学生作品

アート&デザインセンターギャラリー BEで、2013年度前期来訪の留学生たちの作品展を開催。段ボールをベースにダイナミックに描き上げられた金閣寺のドローイングから本格的な陶芸まで、日本文化とのクロスオーバー作品が数多く展示されました。

●美術学部・デザイン学部学生 作品展

各コースの学生作品が一堂に会して展示されました。実際に学生たちが授業で制作した作品とあって、参加者の皆さんも真剣な表情



- 1 今回も大勢の参加者が訪れました(受付)
- 2 カーデザイン入門(インダストリアルデザインコース)
- 3 ガラスアート「吹きガラスに挑戦」(アートクリエイターガラスコース)
- 4 デザイン学部学生作品展
- 5 美術学部学生作品展
- 6 留学生作品展(アート&デザインセンター ギャラリー BE)
- 7 公開授業「パッケージデザインプレゼンテーション」(ビジュアルデザインコース)

で作品を覗き込んでいました。

この他にも、各分野の先生から直接評価・アドバイスが受けられる「持参作品へのアドバイス」や、入試、国際交流などの相談ができる「大学情報コーナー」、キャンパス内の工房やアトリエなどを見学しながら、在生とお話できる「キャンパスツアー」などが行われ盛況でした。

また、今回のオープンキャンパスでは、デザイン学部の公開授業も行われました。大府市に店舗を構える

洋菓子店「パティスリーFUKAYA」様のご協力により、中部国際空港セントレア内にある店舗のショーケースと商品パッケージに、ビジュアルデザインコースの学生たち4グループが挑みました。この日行われたプレゼンテーションでは、FUKAYA担当者から各グループとも高い評価を受けました。FUKAYAセントレア店に、名古屋芸大生がデザインした商品がお目見えする日も近いかもしれませんね。

美術学部 **デザイン学部**
一日芸大生
「みんなが芸大生になる日」
が開催されました

2013年7月28日(日)、本学西キャンパスで、今年も『一日芸大生』が開催されました。これは、小・中学生、シニアの方を対象に、体験講座を通じて一日芸大生としてキャンパスライフを楽しんでもらおうという催しです。美術学部とデザイン学部が趣向を凝らして準備した、芸大ならではの15講座へ、今年も多数の応募をいただきました。

午前10時からの入学式では、学長のウエルカムスピーチ、各講座の担当講師やチューターの紹介、スケジュール説明などが行われ、学長の竹本からの「参加者の皆さん、今日は芸大生として一日存分に楽しんでください。」との言葉で受講会場へと参加者を送り出しました。参加者は受講コースごとに別れて、担当講師から取り組みテーマや制作工程などの説明を受け、制作に取りかかります。

午前の授業が終わると、お待ちかねの昼食タイムです。本校の学生たちが考えた特製ランチを参加者の皆さんに楽しんでいただきました。最初は緊張気味だった子どもたちも、この頃にはすっかり仲良くなり、食事の間のおしゃべりも弾んでいました。チューターのお兄さんやお姉さんから大学のことや授業の話の聞いたりして、あっという間の1時間でした。午

後からは保護者の皆さんを対象にしたキャンパスツアーも開催され、大学の説明や制作現場の見学も行われました。

終業のアナウンスで楽しかった授業も終了。この日制作した作品を持ち寄り、体育館で卒業式が行われました。美術学部長の神戸より卒業証書が渡され、芸大生体験も全員揃って無事卒業です。参加者の皆さん本当にお疲れさまでした。

当日行われた講座内容は次のとおりです。

- ◆日本画コース「日本画入門」〈対象：小学生・中学生〉
和紙に墨や岩絵の具を使ってオリジナルの絵巻物を制作。
- ◆洋画コース「キラキラデコミラー」〈対象：小学生・中学生〉
ビーズやバッジ、シールなどキラキラ輝くテクスチャーで鏡をかわいくデコレーション。
- ◆アートクリエイターコース「彫刻」〈対象：小学生・中学生〉
テラコッタ粘土を使って地球に住む生き物を作りました。
- ◆アートクリエイターコース「ガラスアート」〈対象：中学生〉
ガラスコップをデコレーションして、世界に一つだけのマイコップ作りに挑戦。
- ◆アートクリエイターコース「陶芸」〈対象：小中学生・シニア〉
ロクロでさまざまな鉢作りに挑戦。その鉢を逆さまにした帽子作りも楽しみました。
- ◆アートクリエイターコース「シ



1 期待に胸躍らせる入学式
 2 日本画コース「日本画入門」
 3 アートクリエイターコース「彫刻」
 4 メディアデザインコース「アニメーション」
 5 メタル&ジュエリーコース「ジュエリーデザイン」
 6 デザインマネジメントコース「採集と編集体験」
 7 卒業証書を受け取り一日芸大生を卒業

- ルクスクリーン」〈対象：中学生〉
シルクスクリン印刷でオリジナルTシャツ作りにチャレンジ。
- ◆版画コース「消しゴム版画」〈対象：小学生・中学生〉
消しゴム版画とアクリル絵の具でエコバックを制作。
- ◆しむしむプロジェクト+アートクリエイターコース「アルミホイル彫刻」〈対象：小学生・中学生〉
アルミホイルでキラキラ輝く彫刻や、身につける道具を制作。
- ◆メディアデザインコース「アニメーション」〈対象：中学生〉
カメラとコンピュータを使ってコマ撮りアニメに挑戦。
- ◆インダストリアルデザインコース「プロダクトデザイン入門」〈対象：小学生・中学生〉
木型を使った真空成型体験。完成した型でオリジナルゼリーが楽しめます。
- ◆スペースデザインコース「イス

- のデザインと制作」〈対象：小学生・中学生〉
木と鉄パイプを組み合わせたかわいいイス作りに挑戦。
- ◆メタル&ジュエリーコース「ジュエリーデザイン」〈対象：小学生・中学生〉
ペンダントや指輪などシルバーアクセサリを制作。
- ◆メタル&ジュエリーコース「鑄造体験」〈対象：中学生〉
砂型を使って世界で1枚だけの記念メダル作りにチャレンジ。
- ◆テキスタイルデザインコース「くるみボタン制作」〈対象：小学生・中学生〉
布に描いた絵を使ったくるみボタンとしぼり染めTシャツに挑戦。
- ◆デザインマネジメントコース「採集と編集体験」〈対象：小学生・中学生〉
キャンパスで収集したものを編集して木箱にレイアウト。

デザイン学部
坂上博氏の特別講座
「広告表現論」
が行われました

2013年7月4日(木)、クリエイティブディレクター坂上博氏を講師に迎えた特別講座「広告表現論」が、本学西キャンパスG棟207教室で行われました。

坂上氏は、1951年新潟県生まれ。日本大学芸術学部美術学科を卒業し、同年(株)大広本社へ入社。東京本社企画開発部長、(財)2005年日本国際博覧会協会職員、(株)大広 ONES 名古屋支社支社長を経て、現在では坂上CD研代表、ブリテック(株)顧問を務められています。代表作品には総理府・政府広報「総合企画」、郵政省「日本国際切手展」、東京都「ゴミ減量キャンペーン」、世界都市博覧会「公式ポスター」、三井住友銀行「VI計画」などがあり、日本雑誌広告賞金賞、新聞

広告奨励賞、日本広告業協会クリエイター・オブ・ザ・イヤーノミネートなど多数の受賞歴をお持ちです。

今回の講座は、コミュニケーションコンセプトと華のあるクリエイティブのついてのレクチャーです。主にデザインワークの前段階で行われる、コミュニケーションをデザインするという考え方です。

ここでは「気持ちに届くクリエイティブ」と名付けられ、その流れはだまかに3つのパートで構成されます。1つ目は「マーケティング戦略」。最も重要なスキルの一つで、「課題発見」から「解決策提示」までを筋道を立てて考えます。みんな(社会)が求めているものは何かを創造し、何が足りないかを発見する。そして、そのギャップを埋めるアイデアを考えること。そのためには、コンセプトワークがとても大切です。

坂上氏は「マーケティングコン



1 坂上博氏
 2 ビジュアルデザインコースを中心に多くの学生たちが受講
 3 サプライズ参考例(坂上氏の作品から「住友銀行」)
 4 共感:実感参考例(坂上氏の作品から「政府広報:総理府」)
 5 キーワード力参考例(坂上氏の作品から「東京都:どうしたらいいの?」)

セプトは上位概念としてブレイクダウンされます。」と説明されました。これは、下位のコンセプトは、上位コンセプトに従うというルールで、それができていないものは、コンセプトが破たんしている証拠です。

このマーケティングコンセプトを作るための準備として、最初に行うのがマーケティングリサーチです。リサーチには「定量調査」(アンケートなどの数値統計)と「定性調査」(インタビューによる言語表記)が用いられます。この

リサーチによって課題解決のために何をやるかの基本理念であるマーケティングコンセプトを導き出します。

2つ目が「コミュニケーション戦略」。伝えたいモノの価値を見出すのがコミュニケーションコンセプト。ここでは、最も差別化できるポジショニングを考え抜き、何を伝えるのかを検討します。そのために、消費者の思い込みはどうか?それをどう思わせたいかを短い文章に表します。これが、戦略を一貫通貫する「戦略キ

ワード」です。このキーワードには3つの目的があります。

- ①強くシンプルで「1本のコミュニケーション戦略」を成立させる目的
- ②各セッションの協同作業を「強い意志の旗印」の下に成立させる目的
- ③ユニークで大胆な「華のあるクリエイティブ」へと導いてゆく方法論としての目的

ここで坂上氏は、「コミュニケーションコンセプトが作れば、自動的に戦略キーワードまで作ることができます。この工程では、デ

ザイナーにも積極的にキーワード作りに参加してもらいたい。」と伝えました。

3つ目の「クリエイティブ戦略」では、気持ちに届く華のあるクリエイティブを開発します。それは、伝えたいものの表現上のコアを考え抜く「表現コンセプト」です。具体的には次の3つのステップで行います。

STEP1「クリエイティブジャンプ=ビッグアイデア」(ジャンプは大きいほど良い)

STEP2「正解のクリエイティブ=意味を正しく整理」(意味が正しく・早く伝わるコミュニケーション)

STEP3「華のあるクリエイティブ=さらなる差別化」(他との差別化・共感できるアイデア)

「STEP1のクリエイティブジャンプは、感性を磨き、アイデアの引出を持つこと。そのためには優れた作品をたくさん見て、分析してまねをするのが近道です。私はアートディレクターの浅葉克己さんや電通の鈴木八郎さんの広告を徹底的に分析しました。次に、STEP2の正解のクリエイティブは、誰に何を伝えたいかが正しく明快であること。主従を明確にして、コミュニケーションスピードのある構成を目指します。最後に、

STEP3の華のあるクリエイティブで目指すのは“差別化”です。競合より頭一つ、鼻一つでも抜け出すためのものです。具体的には共感・実感力(心を打つパワーなど)、サプライズ力(最初にやる新しさ、話題性など)、美力(プロならではの完成度)によって、気持ちに届くクリエイティブを完成させてください。」と坂上氏は受講生に伝えました。

この解説の後には、坂上氏が実際に手がけた作品の中からサプライズ、共感・実感、美力の具体例として、小泉首相当時の自民党ポスターや世界都市博などの作品などが紹介されました。

デザイン学部

藤本由紀夫氏による公開講座「デザインと文化2」が行われました

2013年7月13日(土)、本学西キャンパスB棟大講義室で、公開講義「デザインと文化2」が行われました。

70年代よりエレクトロニクスを利用したパフォーマンスやインスタレーション、サウンド・オブジェの制作など、音を形で表現する作品を発表してきた藤本由紀夫氏を講師に迎え、音の記録の歴史、メディアの変遷における表現方法の変化についての考察。その藤本氏を中心とした音と文字とグラフィックの展覧会「phono/graph」について伺いました。

音の記録は1977年エジソンが開発した蓄音器によってスタートしました。エジソンが開発した蓄音機は錫箔に溝を彫り、その溝を擦ることで音が出る簡単な構造です。この蓄音器は、音の(phono)記録(graph)で“phonograph”(フォノグラフ)と名付けられました。この音を残す技術は、先行して世に出た光の(photo)記録(graph)であるphotographyと

もに、20世紀の情報世界を形成する重要な役割を担うことになったと藤本氏はいいます。

さらに、エジソンの蓄音機に先駆けること約20年前。フランスのレオン・スコットも同構造の蓄音機を開発していました。エジソンの蓄音機と異なる点は、音を記録するのではなく、音を視覚化するための装置だったことです。そもそも、なぜこのレオン・スコットは音を見える形にして残したのか。この疑問について藤本氏は、次のように推考されました。

「19世紀後半に見つかったラスコーやアルタミラといった洞窟壁画には、動物などが描かれています。描かれた動物は狩猟対象ではなかったり、実際にその地域や国には生息していない動物だという事が最近の調査で分かってきました。約9千年前の南米の洞窟では、ネガティブハンドと呼ばれる無数の手形が発見されました。この手形は壁に手をあて、手の輪郭に沿って煤などを口で吹いて付けた跡です。暗い洞窟で無数の白い手が浮き上がればきっと誰もが驚くはず。人は何か崇高な目的を持って行動すると思いがちですが、太古の人類はきっと単純に他人を驚か



- 1 特別客員教授の藤本由紀夫氏
- 2 南米洞窟に残されるネガティブハンド
- 3 phono/graphが最初に展覧会を開催した大阪「dddギャラリー」
- 4 dddギャラリーでの藤本氏の展示作品
- 5 ドイツでの展覧会に向けた実験の様子
- 6 ドイツでの藤本氏の展示作品
- 7 講座には他のphono/graphメンバーにも参加

せたかっただけかもしれません。このように、レオン・スコットが音の記録を残したのも、単純な理由だったのかもしれませんが。」実際にレオン・スコットが残したのが、当時の流行歌だったことが最近分かってきたことを藤本氏は付け加えました。

続いて、視覚と聴覚によるメディアの変遷とその歴史的な流れを解説されました。カナダ出身の英文学者で文明批評家のマーシャル・マクルーハンのメディア論をはじめ、タイポグラフィを音楽的に編集した雑誌編集者ステファヌ・マラルメ、

ミニマルミュージクのステイブ・ライヒの視覚的に構成された手拍子だけの曲やビートルズ、クラフトワークに至るまで、音楽と文字、グラフィックを巧みに組み合わせ、メディアと深く係る事例を上げ説明されました。このパートで藤本氏は「メディアが変化することにより、その道具を使う人間にも大きな変化が生じます。」と解説。そのまとめ的に、次のようなメッセージを受講者に送りました。

「パピルスの時代から始まり、紙に印刷するという時を経て、現在では新たなデバイスにより新しい

Column NUA No.22

「八月の濡れた砂」

デザイン学部教養部会教授 荻原雄一



大学受験票の写真(18才当時)

進路を決めて、担任に告げなければならなかった。高校三年生の夏休みの話だ。父はちっぽけな町工場を継がせるために、日大の理工学部へ進学させようと、ぼくを日大三高へ通わせていた。しかし、本人はとうの昔に、文系に進学すると決めていた。ところが、二学期が始まると、秋田明大(日大全共闘で

華々しく活躍していた)の使者を名乗る日大生が、ぼくをこっそりと高校に訪ねて来た。「日大へ来たら、弁論部へ入れ。そこが我々のアジロだ。きみのポストは用意してある」との誘いだった。「きみが高二の時に生徒会長として残した業績は革命的だ、そう秋田明大が評価しているのだ」ところが、どうしてが高校の先生方がこの情報を入手して、「日大には推薦しない」と宣告された。構わなかった。どだい日大へ進むつもりはなかった。都内の大学を覗いて回って、緑と美人の多い学習院のキャンパスが憧れだった。担任に

「学習院大学法学部政治学科」を受験すると報告した。「内申書はちゃんと書いてね」と付け足しながら。「政治学科」を選んだのは、実は総理大臣になりたかったからだ。総理大臣になって、本気で国民のために働いて、みんなが幸せと思える国を造りたかった。はたしてこの年の受験は東大・早稲田が入試中止となる大混乱で、学力の足りない自分も失敗して浪人をした。予備校には行かず、日比谷図書館で苦手の一教科のみ、一人で勉強した。昼休みには気晴らしに古典を読みあさった。「徒然草」「方丈記」が十分に相応しかった。

メディアが続々と登場しています。この2000年ぶりの大改革は、現在の人々にとって変化の過程を体験しているに過ぎず、実際には何が起きているかは、未来になってみないと分からない。このような時代をいつもリードしていくのがアーティストです。気になったものを実践して世に出していく。だからこそ、変化するメディアに対して現代のアーティストたちは色々な実験をしなければいけません。」そのメディアとの新しい関係を目指した取り組みが「phono/graph」プロジェクトです。2001年に大阪

のdddギャラリーから依頼されたギャラリー展示が発端となり、各アート・デザイン分野で活動するメンバーが集まり、それぞれの解釈で音・文字・グラフィックを制作しました。参加したのはタイポグラフィを得意とするnicole schmid、デザインユニットsoftpad、その他にもintextや八木良太氏といった面々が参加。さらに、ドイツのデュセルドルフ工科大学より、この展覧会をドイツ国内で開催しないかというオファーが届き、2012年9月に実施されました。この取り組みを通して「準備のためにみ

んなで実験することにその面白さがあった。」と藤本氏はいました。「スマートフォンなどで文字が動くのがあたり前になると、大人は新しいメディアとしての意味や役に立つことばかりを考えます。しかし、子どもの頃は誰でもいいものに夢中になっていたはずで、「何これ？」が好奇心を芽生えさせ、その答えなどいらぬのです。何かを感じる事が重要で好奇心を持つことが大切です。この好奇心を持ってくれた人たちが、次に何をしてくれるかがとても楽しみです。」とphono/graphの取

り組みについて語りました。今回、デザイン学部の特別客員教授として藤本氏を含むphono/graphスタッフが、7月30日(火)、31日(水)に本学にてワークショップを行いました。そのワークショップの成果として11月に本学アート&デザインセンター ギャラリー BEで展示を行う予定です。「名古屋芸術大学で行うphono/graphプロジェクトでも、実験を通して好奇心を育みたいと考えています。興味がある人はどんどん参加してください。」と伝え藤本氏はこの講義を終えられました。

グループ校特集

名古屋芸術大学 保育・福祉専門学校



本年度より本校でお世話になっております、彦坂美希と申します。1年生の担任をさせていただきます、学生と共に学校のことを知ることから始まった本年度でした。学生の年齢層も社会経験も様々で、高校を卒業してそのまま本校に入学してきている学生もいれば、大学や社会人を経験している学生、母として子育てをしながら学校へ通っている学生もいます。

始めはお互いどこかよそよそしかった学生同士も、すぐに打ち解け、年齢差を感じさせない「仲間」になってきました。私もその仲間の一員となり、学校生活を共に楽しみながら過ごしています。

授業では、前期は「保育内容総論」、「環境指導法Ⅰ」「保育実習(保育所)指導Ⅰ」を担当させていただきました。特に1年生を対象とした「保育内容総論」では、初めて幼児教育という分野に触れる学生が自分なりの「保育観」「子ども観」をつくっていく最初の一步を支えることを考えながら、日々頭を悩ませながら講義にあたっていました。

た。しかし、百聞は一見にしかずと申します。どのような講義も、実際に子どもたちに触れ、保育を体験することにはかないませんでした。本校は隣にグループ校である滝子幼稚園があり、1年生の5月から隔週で実習に入らせていただいています。初めての実習を経験した学生たちは、それまで講義のみで学んでいたことを実際の子どもの姿や実習担当の先生からお聞きしたお話などと照らし合わせながら考えるようになり、講義で学ぶ内容もぐっと身近になってきたようでした。来年度には、本校と滝子幼稚園をつなぐようにたきこ幼児園も設立されます。現在はまだ基礎の段階ですが、完成して子どもたちのにぎやかな声がさらに大きくなるのが今から楽しみです。本校の学生にとっては、ますます子どもたちの様子、幼稚園や保育所というものを肌で感じるができるようになり、学ぶ意欲にもつながるのではないのでしょうか。



本年度より「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「表現指導法Ⅱ」を担当しております、五十嵐陸美と申します。音楽の科目では主にピアノ実技を中心に行っており、学生全員が練習することのできる電子ピアノ室、グランドピアノが配備されたレッスン室を活用しながら、万全の体制で取り組んでおります。

ピアノを初めて演奏する学生にとって、わからないことの連続が将来への不安や焦りにつながり、頭を抱えている様子を多く見受けられます。しかし、保育者になりたいという強い気持ちを支えに、必死に前を向いて取り組んでいる学生の様子を見ると、こちらが刺激を受けるばかりです。表現指導法の授業においては、子どもの発達を根幹に据えた歌唱などの指導を取り入れ、学生が保育者として生きる際の表現の引き出しの一つでも多く身につけることができるよう、日々試行錯誤を繰り返しております。リズム遊び、歌遊びなどを楽しそうに取り組む学生たちが、今後保育者になって子どもたちと表現の楽しさを共有する日がくることを、今から心待ちにしております。

2年ないし3年間の中で学習する内容は広く、時間と闘う毎日です。

それに加えて、卒業学年の就職活動、学校祭を中心とした学生会の活動を行い、学生は息つく暇のない濃密な時を過ごしています。それらの活動を通して、不安な気持ちが将来への希望を見失わせてしまったり、一度立ち止まって考え直す時間が必要になったりと、学生たちが抱える悩みも様々です。しかし、担当クラスの学生をはじめとして、悩みと闘いながらも明るく元気に学校生活を送り、夢に向かって精進していこうとする学生の姿に勇気づけられ、共に歩む日々喜びを感じております。

また、今年度より滝子幼稚園の先生方とともに音楽の研修会が始まり、子どもたちの更なる成長と滝子キャンパスの発展を目指して、先生方と研究を深める機会をいただきました。幼稚園との共同研究が、園で過ごす子どもたちや専門学校の学生の学びに活きるものとなることを共通の目標として掲げ、行事を中心に据えながら協力体制をつくっていきたくと考えております。長い時間を要する取り組みにはなりますが、子どもたちと学生のめざましい成長を少しでも援助することができたら嬉しく思います。



そして、悟ってしまった!「政治がいくらよくなっても、(失恋や病気を苦に)自殺する人は減らない」と。では、自殺を防ぎ、みんなを幸せにできる分野は?「宗教」と「芸術」だ。しかし、「宗教」とは無縁だった(三十代の前半に、某新興宗教の団体から、突然「二代目の教祖」に推薦されたが、勿論お断りした)。残るは「芸術」である。といて、十代の後半にもなって、今から「画家」や「彫刻家」にはなれまい。当然「指揮者」にもなれまい。残っているのは、「芸術」かどうか怪しい領分だが、「文学」しかない。「文学」ならば、

現代文も古典も漢文も、人に負けたことはない。よし、「文学」だ!「文学」で、みんなを幸せにしたい。こう決意をして、浪人中に「政治学科」から「国文学科」に進路を変更した。すると無味乾燥だった英単語の暗記にも自然と熱が入った。

そんなある日、日比谷図書館の食堂のテレビが、人類が初めて月面を歩いたと、映像と共に伝えていた。ショックだった。自分は今自分のためにだけ、「勉強」をしている。こんなくそっつれな毎日は、とっととやめにしたい。「学問」をしたい。一刻も早く大学に入って、他人の役に立つ

「学問」をしたい。ぼくはアポロのニュースを観ながら、悔し涙をこぼした。その日も夜の九時になると、閉館を知らせる「ボレロ」が流れ、外に追い出された。いつものように日比谷公園は若いカップルでいっぱいだった。なぜか彼らを殴りつけた衝動にかられた。それから、しばらくしてまた八月になり、初恋の女性を長野県の学生村に追い掛けて行き、そこで失恋した。みんなの幸せは元より、自分の幸せもままならない、十八歳の夏だった。

— 了 —

マスター



アーティスト

【第22回】



< 変化 >

平田哲生 デザイン学部教授

(ひらた てつお)

1949年 三重県生まれ
1973年 九州芸術工科大学卒業
1982年 名古屋芸術大学教員
2001年 名古屋芸術大学デザイン学部教授

■デザイン及び展覧会

1983年 学生たちとシェルター(小屋)の設計をし、山の中に実際に建築(文部省研究助成)
1987年 デザインフォーラム'87 入選 東京 日本デザインコミッティー
1988年 アテネ会館図書室(三重県桑名市)、増築設計
1990年 旭川国際家具デザインコンペティション入選
1993年 Green Design in Yamagata 奨励賞
1994年 富山プロダクトデザインコンペティション 優秀賞
1997年10月 時のうつろい展 名古屋市民ギャラリー インスタレーション



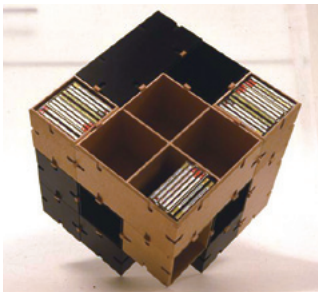
コストコがオープンする前の常滑。本学、常滑工房隣の建物の2階にあるアトリエ兼ギャラリー兼倉庫にお邪魔したのは、ひたすら暑かった今年の夏でもとびきり暑い日だった。アトリエには冷房がなく、汗はシャツを湿らせた。それでも時折、風が細い路地を吹き抜け、海から涼しさを運んでくれた。子どもの頃の夏はこんなだった、と常滑になぜか懐かしさを覚えた。

「野外研をやってからそうなったのか、自分からそういうものに目が行っていたのかわからないけど、僕のところには古いものが集まってくるんですよ」 倉庫には、文字通り、無数の古道具たちが保管されている。アトリエにある円卓は、

真ん中に巨大な火鉢が据えられているが、これもいただいたものだそう。火鉢を囲むテーブル部分は間伐材で作られている。思えばこの建物自体も、今は使われなくなった土管の製造工場を借り受けたもの。徹底しているではないか。

古いものに興味を持つようになったのは、東京のデザイン会社に勤めていた1970年代だった。仕事場の近く、銀座1丁目の角にお茶屋があった。ある日、そこに使われなくなった大きな木の茶箱がいくつも積まれて売られていた。白木で白い紙が貼られ内側は錫貼り。茶箱自体が魅力的に映ったのに加え、銀座の真ん中に、突然、田舎の雑貨屋が出現した

ような光景が面白く、つい買ってしまったという。寮住まいだったその頃は家財道具もなく、プレゼンで使用済みになったボードや酒屋でもらった酒瓶を入れる木のケースを組み合わせ、自分用の家具を作っていた。1960年代〜70年代、世の中が急速に変わっていった時代。東京には新しいものが次々生まれ古いものは捨てられと、街も生活もめまぐるしく変化していった。そんな中で出会った白木の茶箱に魅せられ、そこから、彼の中でも何かが変わった。ほどなくして、退職してしまう。「はっと気が付いて、自分が本当に好きなことがほかにあるなと思ったんだよね。古いものが持っている、新しいものでは作り得ないもの。そこに



1994年 富山プロダクトデザインコンペティション
優秀賞受賞作品

■ 家具デザイン



2002年10月 東京デザイナーズブロック参加
Macla

■ 地域プロジェクト



2007年5月
常滑アート&デザイン工場
「利助 三信 佐平治」
企画運営／参加



2004年 旭川家具国際コンペティション
参加作品



2010年 旭川家具国際コンペティション
参加作品

「エヌソー」 2004年4月
新入生向けの家具、道具、学用品 リサイクルオークション
2002年6月より
「西春町中心市街地活性化大学連携交流事業」受託研究



■ re-design



2012年 re-design 2000-2012展
12年間に渡る学生、卒業生とのプロジェクトを振り返る



火鉢と間伐材が組み合わされた円卓。これも「re-design」。ギャラリーとして使う時には、来訪者の休憩場所となり、知らぬ者同士が自然にうち解けるという、落ち着いた空間を演出。

- 2000年4月～ 幼稚園の椅子プロジェクト
- 名古屋芸術大学BEギャラリー、名古屋アートポート他
- 2001年7月 Museum Box展「ZONEギャラリー」
- フィールドワーク 考現学
- 2001年9月 Wood Design Creation展 国際デザインセンター 主催
- 中部デザイン団体協議会 家具デザイン
- 2001年1月 20世紀の建築文化遺産展 名古屋市民ギャラリー
- ファン・デ・ナゴヤ美術展 / 名古屋文化基金事業
- フィールドワークに基づくインスタレーション
- 2002年10月 東京デザイナーズブロック参加
- Macla 家具デザイン
- 2003年10月 東京デザイナーズブロック参加
- wafers+biscuit 家具デザイン
- 2004年10月 東京デザイナーズブロック参加 peanut 家具デザイン

- 2007年4月～ (株)天童木工との産学協同プロジェクト 企画運営
- 2007年5月 常滑アート&デザイン工場「利助 三信 佐平治」
- 企画運営／参加
- 2008年10月 常滑フィールドトリップ2008 参加
- 2009年10月 常滑フィールドトリップ2009 企画運営／参加

■ 出版、寄稿

- 1989年 「転用のデザイン」 野外活動研究会 共著
- 1994年10月 「公共空間のデザイン」 大成出版社 共著
- ～2002年12月 毎日新聞 「不思議いっぱい」
- 野外活動研究会のメンバーと連載
- 2003年3月 「目からウロコの日常観察」 農文協 共著

■ プロジェクト

- 2002年6月～ 「西春町中心市街地活性化大学連携交流事業」
- 委託研究 西春日井郡西春町
- 2003年2月 「昭和のくらし展」 名古屋市中村区 名鉄百貨店
- 2008年4月～ 名古屋市文化振興事業団 評議員
- 2003年 都市景観デザインにかかわる委員
- 名古屋市(2003年度まで)、一宮市(2004年度まで)

デザイン会社勤務を経て独立。家具デザインをメインとしながら、野外活動研究会に参加。フィールドワークを行い、道具と人のかかわりを観察し続ける。

目がいった。やっていた仕事は一生続けることじゃなくて、ほかにやることがあるだろうなと思ってたね」

常滑の街には、瓶を埋め込んだ塀や焼き物の土管を敷き詰めた路地が至るところで見られる。道具が本来の使われ方から離れ、別の形で利用されている。廃物利用から始まったことだと思われるが、こうした光景が常滑の街のアクセントになり訪れる人々を魅了している。そこにあるのは、美しさや工夫の面白さに加え、かつての多くの人の営みを想像させる生活の郷愁である。氏が長年関わってきた“リデザイン”とまったく同じことと思えた。クリエイションから廃棄される椅子

を利用した「幼稚園の椅子プロジェクト」や一連の「re-design」の活動も、転用された機能そのものよりも、かつて子どもたちが使った椅子や机という事実が作品を彩り鮮やかなものになっている。“もの”そのものに対する愛惜とそれを使った人々の記憶が、興味の対象と思われた。しかし、それは違っていた。「古いものがある、それをそのまま骨董的にみるのもいいかもしれないけど、今のセンスで別のものに変える。変えていくことが面白いんだよね」

「“もの”を作り変えることを考えるとき、自分でここがいいと思ったところを残しながら作り変える。その違いが面白

い。彼はここを見ているんだな、別の子はここを見ているんだなと、当然、人によって見ていることや価値観も違ってくる。考えることも変わってくる」人と“もの”が変わることの面白さを何度も口にした。興味の対象は、変化することだった。人の生活が変化していったことにより、道具は作り替えられ変わっていった。逆に、ものを作り変えることにより、人も変化する。課題に取り組み、人と接することで、学生たちも変わる。「僕自身も変わった。名芸大に行って、いろんな先生に出会ってまた変わった。絶対にそうだと思うよ」「もの」を通して見ていたのは、人間の変化だったのだ。

